Re:TURN

葉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅ：ＴＵＲＮ

【Ｎコード】
Ｎ２１５３Ｍ

【作者名】
葉音

【あらすじ】
普通の？高校生霧谷雨月は突然現れた黒い穴へと落ち、気づいた時には異世界へと飛ばされていた。そしてたどり着いた場所には最強の魔法『時空魔法』の魔導書が。そして……　△▼△▼△▼△▼△▼△▼
主人公最強設定、ハーレムにはならないはず？一章一章を短くしてそれなりの更新速度は保つつもりです。え？『Ｆｌｏａｔ』はどうするのか？あははははー、だってこっちの方が書くの楽なんだもん！っておい！作者ってか私！それでいいのかっ！ちなみに、瑞葉ち

ゃんお気に入りです。感想とか書いてくれたらうれしいです。そして好きなキャラとか書いてくれたらもっとうれしいです。泣きます、感涙を流します！以上、つい調子に乗ってしまう作者でした。作中で暴走したら遠慮なくどうぞ。実はスライム最強なのですなわちスライムである私は最強だから叩こうが潰そうが焼かれなければ平気なのです！つまり作者ＬＶ１というわけなのです、はい……夢はメタルキング……

scene00

むせ返るような濃密な埃の壁

床にも何を間違ったのかこれまた分厚い絨毯のように埃が積もっている

なんと『地面についた足は柔らかく受け止められ、体重は足音とともにそれに吸収される』なんて情景描写が当てはまってしまった

それもこの小さなおんぼろ小屋にだ

「意味不明だな」

そう、意味不明だ

是非、あのあからさまに怪しい老人には説明をしていただきたい

それが出来ればお年寄りは大切になんて妄言を忘れて、最低でも小一時間は問い詰めてやりたいところなのだが……

やりたいところなのだが！

「どこにもいないってどういうことだよ！？」

クソッ！

状況は理解不能だし、誰もいないし、埃っぽいし！

なんかもう涙が……

あぁ、ちなみにこの涙は埃のせいだからな

なんせ窓からの光がくすむほどの密度

目に悪いことこの上ない

「よし、考えるのはやめてとりあえず掃除だ！」

こうして俺、霧谷雨月（キリヤウヅキ）の冒険は始まった

非常に不本意ではあったが……

scene01

X県Y市Z町

昔、深い霧に覆われた渓谷が唯一城下町へと向かう道だった頃

その渓谷が開拓され関所が置かれたことからここに村ができ、それが今ではそれなりの規模の町になった場所

はっきり言うと田舎だ

とはいえ市内へは車で15分という立地のよさから人が少ないわけではない

娯楽施設なんかが全く無いせいでみな市内へと出払って過疎っているだけだ

学校なんかも市内にしか無いので昼間など死んだように静かだったり

とまあそんな過疎った場所の公園に俺はいる

そして俺の視線の先には輝く金髪に白い歯を見せ付けながら（自覚なし）美少女を数人はべらしたハーレムイケメン野郎

お前彼女はどうした……

と思ったら奴のすぐ隣で腕に抱き着いていらっしゃる

ハーレムイケメン野郎に触れるのは彼女だけなんだとか

リア充は死ね

「昼間っからいちゃつきやがってウザイんだよっ！」

あ、これには激しく同意したいが俺の言葉ではない

最近この辺で規模を拡大してる不良集団の一人がハーレムイケメン野郎に喧嘩を売っているのだ

しかしハーレムイケメン野郎こと二之宮颯（ニノミヤハヤテ）は、ハーレムイケメン野郎のくせに優しく正義感にあふれる正直者

善人と不良とは相容れない定めであり……

「ふざけんなっ！」

不良ブチ切れでガチバトル開始、にはならず

「ちょっとゴメンよ」

横からドロップキック炸裂で俺登場

めんどくさいが仕事を始める

「テメェ、銀灰の覇王！」

ドゴッ！

あ、ついムカついて回し蹴りが

母方のじじいがアメリカ人のせいで俺に混じった外人の血が髪と目を銀と黒の間、燻し銀？というかくすんだ灰色なのだ

そこで厨二病全開の不良達がいつしか銀灰の覇王などと

「男のくせに女の子の前で喧嘩しようなんて恥ずかしく無いのか？」

あ、ちなみにこれ定型文な

俺の気持ちなど欠片もそこには存在していない

営業スマイルと同じ類のものだ

で何故こんなことしているかといえば、実は本気で営利目的だったり

俺の家は武士の家系で道場を開いている

だから俺が熱い言葉で不良を説得、最後に道場で鍛え直してもらえと言って立ち去る

そして道場を尋ねた不良達は俺の熱血親父に武士道や真の漢について学び、厳しい修練の後性根を叩き直され真人間として社会復帰

というわけで親御さん大感激で謝礼金がっぽり、ついでに俺の懐も……

ちなみにこの計画は母親のものだ

俺よりやや明るい銀髪をした色白の美人なのだが腹が黒い

というわけで俺説得中

もちろん拳を交えながら

ん、一方的だから交えてないな？

まあいいか

俺は相変わらず大振りの攻撃をする不良へと近づく

大振りの攻撃は当たれば強力だが当たらなければただのサンドバック

左の掌底を相手の胸に打ち込み、体勢の崩れたところにさらに顎へと右の掌底を打ち込む

下からの打ち上げる衝撃に体を浮かした不良

さらに俺は駄目押しのハイキックを側頭部に決める

上へ下へと忙しい不良はさすがにまう立ち上がれず、地面に手を付き昼食を胃からリバースしている

で、それを傍目に定型文を唱え続ける俺

さすがに数十回もやれば口が勝手にしゃべってくれる

不良が感激して涙を流しているし多分成功だろう

俺はさっと身を翻すと欠伸を噛み殺しながら帰路につくのだった

scene02

「さっきは助かったよ雨月」

あのあとふらふらと町を歩いていた俺は爽やかな笑顔に白い歯を見せ付けてくる颯に出会ってしまった

言い忘れていたがこいつは父親がフランス人の資産家でつまり大金持ちのボンボンである

名前？フルネームなら二之宮＝リッケンハルト……バルフ＝颯だ

「名前で呼ぶな気色悪い」

と俺はお決まりの返事を返す

親衛隊の皆さんからの熱い視（死）線を感じたが無視

奴とは幼なじみなのだからこの程度挨拶の一種だろうに

「相変わらずだね霧谷」

と相変わらずお花畑でも背景に出て来そうな笑顔の颯

「お前こそ順調に勢力拡大してるな」

刺されて死ねばいいのに

と俺の表情筋を斉動員して黒い笑みを浮かべる

「ははっ、そんなつもりは無いんだけどね」

颯は俺のダークサイド全開の笑みにたじたじになりながら、困ったように笑う

全くイケメン補正で困り顔すら完璧とは……

それより視（死）線が一層きつくなった気がしたが、直視したらやばそうな気にしないことにしよう

「ところで霧谷」

すると今まで困り顔だった颯が突然真剣な眼差しで俺を見てくる

やめろ、お前に関わるとめんどくさいんだ

「この子達のこと、頼んでもいいかな？」

嫌だ、絶対に嫌だ

誰が好き好んで颯親衛隊のお守りなんかするか

ぱっと見美少女の集まりだがこいつら全員例外無く颯信者であり颯のためならなんだってやってのける変人でしかも颯がいないと世界がくすむだの死の苦しみだのなんか詩的なことをガチでほざき始める夢見る乙女でありしまいには颯なら颯はきっとやらなんやら颯の穴を埋めるために人をパシリにした揚げ句やっぱり颯じゃなきゃ駄目とか言い出して女じゃなければ即刻俺が全力でぶちのめすような奴らだぞっ！？

「無理、他を……」

「誰がこんな奴と！」

「そうですわ颯！」

「……離れたくない」
「やだやたやだぁ！」
・　・　・

何この大合唱？

皆さんこの世の終わりのような形相で叫んでるんだが

ちらっと颯を見れば、逆になんとかしてと目で訴えられた

いやいや自分でやれ

「頼むよ霧谷、絶対にやらなきゃならないことがあるんだ」

するとやたらと必死な様子で頼み込んでくる

「本当にだろうな？」

女の子とお茶するとかだったらぶっ殺すからな？

ま、三船沙織（ミフネサオリ）にベタボレのこいつが浮気するわけもないが

彼女いるのに親衛隊って話だが、颯はあんなだからどうにか出来る訳もなく、三船は『颯が裏切る訳無いし、あんな有象無象居ても居なくても同じだから』とのこと

「ああ、もちろん」

まあ、そもそもこいつは嘘を着けない人種だし、最初から疑ってなどいないが

「引き受けてやるから話を合わせろ。あと、行き先を教えろ。どうせ一人じゃ解決出来ないだろ」

なんて優しい俺

これからやることを思うと頭が痛くなってきたぞ

「ゴメン、ありがとう。場所は廃校だよ」

あー廃校な

うん、そこ不良達の根城じゃないか

そこに一人で行こうなんてなんか怒りよりも哀れみを感じるんだが？

「あ、颯」

棒読みで声を張る俺

いやいや演技力なんて知るか

どうせ颯補正で俺の声などノイズの親戚程度にしか認識されちゃいない

「なに霧谷？」

そこで颯参戦、二十四の瞳が一斉に集中した

怖えーっての……

「昨日倉の掃除してたらなお前の子供の頃の写真が見つかってな。要らないから捨てようと思うんだがいいか？」

おぉ、親衛隊の皆さん目がギラギラしていらっしゃる

「うん、いいよ」

と、俺の意図を理解した颯が快く承諾する

「「「私に下さい！」」」

まあその結果、なんか目の前に人参ぶら下げられた馬のように興奮した表情で颯に詰め寄る親衛隊

その間に俺はダッシュ

「う～ん、いいけどそれは霧谷に言わないと……」

それを見た颯は適度に間を開けてそう言う

ナイスだ

……いや、撤回

一斉に俺の方へと振り返った親衛隊の方々がなんか物凄い表情で追っかけてきた

なんかさっそく後悔してる

クソ！通行人薙ぎ倒しながら迫って来る美少女とか恐すぎる！

「颯、後で絶対殺す！」

そういえば俺が颯と話さなくなったのって巻き込まれるのが嫌になったからだったような……

scene03

「化け物……いや恋する乙女、恐るべし」

現在俺死亡中

あのあと２０分ほどのデスレースの後、知り合いの家に隠れなんとかやり過ごすことに成功

いやいや、男でしかもかなり運動神経のいいはずの俺に着いてくるとか何者だよ

「悪いな瑞葉（ミズハ）、突然押しかけて」

と、俺は呆れ顔で俺を見下す人物に謝罪する

ちなみに見下されてるのは俺が玄関に入ってすぐ床にぶっ倒れてるから

いや、体は疲れてはいないんだが精神がちょっと……

「はあ、相変わらずだね。ところでさっきのあれ何？まさか……」

いやいや瑞葉、なにを想像している？

頼むからその侮蔑の瞳は止めてくれ

あと、なんでお前悲しそうなの？

「別にいいけど、女の子悲しませたら駄目だからね」

いや待て

「あれは颯に頼まれて親衛隊をだな……」

なんだその目は？

てかコイツ颯補正が効かない希少種だったよな、っていまはそんなことどうでもいい

「どうかしたか？」

何か様子がおかしい瑞葉に俺は立ち上がって顔を覗き込む

うん、やっぱり美人

派手じゃないんだが目鼻立ちは整ってるし、綺麗な艶やかな黒髪の持ち主だ

颯の周りにいるようなのよりはこういう大人しい系のがいいよな

とくに精神的な面において

「なんでもない……」

えーと、俺どうすれば？

って、颯助けに行かないと！

「悪い！瑞葉！突然押しかけといて悪いんだけど颯助けに行かないと！」

俺は急いで玄関の扉へと手をかける

ガシィ！

「……何？」

いやあの急いでるんで服掴まないで下さいお願いします

「連れてけ」

は？

「危険なんだけど？」

そりゃ瑞葉が強いのは知ってるが女の子を巻き込めるわけが……

「連れてって下さい」

丁寧に言われても……

「駄目……？」

やめろ、上目遣いで目をうるうるさせるな

俺の心が折れる

「理由は？」

なんか連れていく流れになっている気もするが、このままだと心がやばいので話を変える

「私も颯が心配だし、それに……」

何故そこで俺を見る？

てかさっきのうる目はどこに行った？

「仕方ない……ただし！隠れてろよ」

結局折れる俺

あぁ、瑞葉耐性が欲しい

「うん！」

しかし瑞葉の笑顔が見れてまあいいかと思ってる俺ってどうなんだ……

瑞葉は颯と同じただの幼なじみなんだけどな？

ん？だからか？

家族の次に大事な人って言われたら多分瑞葉って答えるしなあ

むしろ幼少期から俺に血を吐くような特訓をさせている親父とじじいよりは上かもしれない

息子（孫）に剣術、拳術、銃術、サバイバル術、軍隊格闘に加え武士道に漢道やら兵法まで教え込むってどうなんだ

おかげで不良十人くらいなら薙ぎ倒せてしまうが……

それで瑞葉や颯のピンチを救えたこともある訳だが……

まあそれに関しては一応感謝はしているつもりだ

「急ぐからチャリ貸りるぞ？」

俺は当たり前のように玄関に置いてある自転車の鍵を持って外へ出る

しかしさっきパジャマだったのにすぐ準備出来るのか？

ん～一分待ったら出発しよう

つーかまだ日が沈むまで少し時間はあるのに、もう寝る気だったのかあいつ？

「どんだけ眠いんだよ……」

「寝不足なの、悪い？」

速っ！

「ほら、早く行こ」

いや、そりゃ行くがそれだけか？

普通怒ったりするんじゃ……ん？心なしか顔が紅い、かな？

しかしほっそりした黒っぽいジーパンにこれまた黒のノースリーブとはなんとも地味な……

そりゃ美人はなんでも似合うと言うが、オシャレが右手首の腕輪数種と頭に乗っけたハンチング帽だけって女の子としてどうなんだ？

「二人乗りとか久しぶりだな。落ちるなよ？」

まあ、本人は多分あれで構わないのだろう

「ば、馬鹿！こ、怖いこと言うなっ！」

そう言って俺の腰をがっちりホールドする瑞葉

逆に漕ぎづらくなって危ないんだが……

あ、そういえば瑞葉昔自転車でこけて怪我したんことあるんだったな

「悪い、安全運転で行くから安心してくれ」

ギュッ

ん、これは了承を得たと思っていいんだよな？

それじゃ……

「ヘッポコ勇者の颯を助けに行きますか」

それだと瑞葉が姫で俺がそれを護る騎士ってとこか？

俺が騎士とか……

似合わねーなぁ、おい

ｓｃｅｎｅ０３（後書き）

書き溜めていたのはこの章までなので、これから更新速度が落ちます

ｓｃｅｎｅ０４（前書き）

『更新遅れる』とかいっといてアレですが、一章５時間くらいのペースで書くのでこんなことに

普通に順調ですね、ハイ……

で、でも！絶対すぐに更新遅れだすんだからね！

覚悟しときなさいよ！

うーん、私はツンデレじゃないはずなのになぁ……

scene04

「着いたぞ瑞葉」

俺はそう言っていまだにホールドしている瑞葉を引きはがしにかかる

だが、中々離れてくれない

「霧谷、もう着いたの？」

いや、見ればわかるだろ？

「だから着いたって」

「実はまだ着いてないとかないよね？」

いや、そんなことしてどうする？

急いでるって聞いてただろうに

「ないない、絶対ないから早く離して」

「うぅ、わかった……信じる」

だから何故そんな深刻なことに？

っと、やっとホールドが外れた

なんか息が出来るって素晴らしいなんて考えが頭を過ぎりったりした

どんだけの怪力でホールドしていらっしゃいますか瑞葉さん

「グスッ、怖かった……」

……

俺思考停止中

「霧谷ぁ……」

ガシッ

えーあーうー

これはあのその泣いてるのか？

うん、泣いてるよな？

で、さらに抱き着かれてるな

えーと、こういう場合はどうするんだったか？

早く復活しろ、俺の思考回路

えー、とりあえず

瑞葉が落ち着くまではこのままということで

え？頭を撫でる？

俺が、瑞葉の？

いや、無理だから

俺の恥死量超えてるから

「霧谷！」

な、なんだ！？いきなり大声出すなよ！

「今のは忘れて、てか忘れろ！」

え、無理

瑞葉の泣き顔とか希少過ぎてしっかり記憶されてる

というか真っ赤になって必死にごまかす瑞葉って……

いやいやそんなことはどうでもいい

「目にゴミが……「瑞葉、そろそろ行かないと颯がやばいんだが」

なんだその忘れてたと言わんばかりの表情は？

俺だってさっき一瞬忘れてたが……

「行こっか」

にしてもなんで瑞葉不機嫌になってんだ？

わからない……

女ってなんでこんなに複雑なのだろうか？

もう少し素直になれば自分も相手も楽だし、その方が絶対いいと思うんだがなあ……

ま、これ瑞葉に言ったらなんか嫌なことになりそうだから言わないが

「霧谷（の鈍感ばかあほもう死んじゃえ、て死ねのは駄目！絶対死んじゃ駄目なんだから！）早く！」

「はいはい」

なんか副音声が入ってた気もするが、多分気のせいだろう

というかどうせ俺には理解不能だろうし

今だってなんか焦ったような顔した後になんか睨んできて、少しも考えが読めないのだ

「ま、それでいいか」

多分それが当たり前なんだろうから

それはともかく……

「まだ生きてろよ、颯」

ｓｃｅｎｅ０４（後書き）

瑞葉ちゃん大活躍！

皆さんはどうかわからないけど私こういう子大好きです！

「目にゴミが……」とか言ってるんですよ！可愛い過ぎです！

え？目の付け所がおかしい？

人間、他人と違ってこそなのだよそこの君！

ｓｃｅｎｅ０５（前書き）

いつになったら異世界行くの？な皆さんもうちょっとです

書いてたら中々異世界に行ってくれないのです……

はい、作者の力不足ですね、精進します……

scene05

廃校にある体育館

不良達が持ち寄り積み上げたガラクタによって半要塞化したその奥に、おそらく応接室から盗って来た高そうなソファーに座る男が一人

吊り上がった目尻、猛禽類のような鋭い瞳、歪んだ笑みを浮かべる口元、そして颯とは似ても似つかないくすんだ金髪

ここの不良グループのリーダー生島剛（イクシマゴウ）だ

おそらく颯では全く歯が立たない程の実力がある

なんせこの一帯の不良グループを生島と部下三人の計四人だけで捩伏せ配下に置いたのだから

幸い颯を舐めているせいか、今は生島以外には雑魚数人しかいない

相手の懐の中ってのを差し引いて五分五分といったところか？

「二之宮ぁ、歓迎するぜぇ！」

下で動きがあったな

ちなみに今体育館の屋上から侵入して様子を伺っている

「僕が……すれば……解放……って……じて……かい？」

んーさすがに颯の声までは聞こえないか……

「ああ！もちろんだ！」

生島がそう言うとガラクタの山から左右から男二人に押さえられ、
紐で手足を拘束された少女が現れる

この距離でははっきりとはわからないが何かされた様子はとくにない

颯も無事な姿を見たからか安堵しているようだし

「ほら！約束通り解放だっ！」

すると男に突き飛ばされるようにして颯の足元へ倒れる少女

颯が直ぐさま駆け寄り縄を解くが何故か不良達は動かない

無防備な颯を攻撃する絶好のチャンスだろうに

それほど颯を舐めているのか？あの計算高い生島が？

ありえないな……

何かあるが、何かある前にやるべきだ

時間はかけない！

俺は体育館の入口付近の床に降りると、門番らしき二人の後頭部へ手刀を打ち込む

焦る必要はない

生島の位置からはガラクタの山が邪魔でこちらが見えていない

まずは手下の始末

足音を殺し背後から接近、一撃で意識を刈り取る

ちまちまとめんどくさいが安全第一だ

「……！」

どうやらまだ生島が颯に罵声を浴びせているようだし、まだ時間はある

そうして俺は最後の関門、不良五人が固めている生島のいる場所への通路へ近づく

この際もう気づかれても問題無い

俺は走る勢いを拳に乗せ、力任せに一人殴り飛ばす

さらに何事かとほうけた不良達の一人に蹴りを入れ、その隣にいた不良の鳩尾に突きを放つ

「旋脚」

本来は崩れた体勢からでも攻撃出来るようにと考えられた技であり、旋脚は相手に攻撃を避けられ体重が前に偏った際に放つ蹴り技

本来は偏った体重にさからわず逆立ちの用量で地面に手を付き、腰の捻りで蹴りを放つ

まあ、ワン〇ースのサ〇ジのあれだ

この技、不意を突くには持ってこいなのでよく使う

ただしもともとが緊急避難用の技なので強い奴には効果が薄い

だがまあ……

「ふぶっ！」
「げはっ！」

下っ端の不良二人を吹き飛すには十分だ

「……だれだ、テメェ？」

さすがは生島

全く焦っていない

「お前ら、やれ」

しかし俺の相手を手下に任せたのは間違いだな

俺は途中で不良から奪った木刀がある

負ける気がしない

心に描くのは闇夜を写す細波一つ無い水面

意識は加速し、世界は減速する

そして一石は投じられた

波紋は広がる広がる

広大な円を描きながら

「……斬！」

俺にとって円の拡大は溜め込んだ力の拡大を示す

それが俺の祖先の作り上げた剣術

『夢幻の闇、幽玄の水を制す』ってのが基本理念だ

「雑魚はどいてろ」

俺は一閃で五人を沈め、完全に腰の引けた奴らにそう言う

木刀では技の威力に耐えられない

あと三度も振れば折れそうだ

雑魚相手に使いたくはない

「……雨月」

すると颯がこちらに駆け寄ってくる

少女は颯に隠れて見えないな

「名前で呼ぶな気色悪い」

まあ無事ならいいか

「また助けられたね。ありがとう」

「ふんっ……」

スルーかおい

てか感謝じゃなく謝罪しろ

トラブルばっか起こしてすいませんってな

「あの、ありがとうございます……」

ん、これは颯が助けに来た子か

いつの間にか俺の背中に隠れてやがる

まあ、たしかに颯の背中よりは安全だろ、う……？

「……お前」

「テメェ！霧谷雨月かっ！」

焦ってんのか生島？

ボスならもっと堂々としたらどうだ？

「何しにきやがった！？」

何しに？

いやいや、颯助けに来た以外になんかあるのかおい？

だが、まあ……

「生島さん！」

すると通路から男が一人

たしか生島の三人の部下の内の一人だったか？

ただもう顔中あざだらけでふらふらになっているが……

「何が……」

「えいっ！」

この声、まさか……

「あ、お取り込み中だった？」

「瑞葉のバカ……」

「ば、ばかっていうな！外で待ってたらコイツともう一人に襲われて仕方なかったの！」

はいはい……

どうせ心配になって不用意にうろついてたんだろ？

ただ二人か

部下は三人だから、最後の一人はやっぱり……

「お前だろう？」

俺は背中にくっついている少女の手を掴むと、半ばたたき付けるようにして床に押さえ付ける

「「「「なっ！？」」」」

すると颯と瑞葉、そして不良全員から驚きの声が

ただし生島だけは舌打ちの後に俺ではなく、俺に取り押さえられた少女を睨み付ける

それはそうだろう

「俺を騙せるとでも思ったか？生島花（イクシマハナ）」

俺が押さえ付けているのは生島の妹で、相手グループの懐に潜り込み内部崩壊を起こしてきた人物

たった四人で不良グループを潰すのを可能にした影の功労者だ

まあ、そうは言ってもコイツの死んだような目を見てなければやばかったかもな……

「役立たずが……」

おいおい生島（兄）、妹にそれは無いだろう

「ご、ごめんなさい……今度はちゃんとやるから……殴らないで、お願いだから！」

あーそういうことね

はい理解した

俺の下でがたがた震えてるコイツは、兄の暴力が怖くてあんなことをしていたと

「そういうことか」

颯と瑞葉も理解したようだ

「女の子にそんなことするなんて……許さない！」

怖えーな瑞葉

もう止まりそうにない

「颯、任せた」

俺は涙を流しながらごめんなさいを連呼する少女を颯に預ける

それにしても、颯が怒ってる姿久しぶりに見たな

かく言う俺も怒ってはいるが

「死んで詫びろ」

ということで、ダラダラとめんどくさいことを考えるのはここまでだ

生島は、倒す

ｓｃｅｎｅ０５（後書き）

生島との戦闘シーンをばっさりカット

だって文量が増え過ぎてるから

てか霧谷と瑞葉ちゃんにやらせるとフルボッコにする光景しか浮かばないんです

理由は次の章で……

ｓｃｅｎｅ０６（前書き）

今回も瑞葉ちゃ……おっと、伝達事項があるんだった

更新はいつも１２時に行います

要らない情報かも知れませんが一応です

scene06

「あぐっ……」

そんな呻き声とともに床へと叩きつけられた生島は、ついに本人の意思を無視して意識を肉体から引きはがされた

瑞葉はとくに何もしていない

そもそも瑞葉に荒事をさせるつもりはない

突然話は変わるが、生島は弱かった

そこら辺の不良を相手にするのと変わらない

「どういうことだ？」

まあ、だいたいの想像はつくけどな

策をめぐらし、罠にはめ、自分は直接手を出さない

けれど自分より弱い妹には……

まあ、そういう奴だったのだろう

俺は頭を潰され右往左往する不良どもを無視してこの場を立ち去る

こんな場所にいつまでも居座ってられるか

さっさと帰って、さっさと寝て、この不快感を早々にに解消したい

んだ俺は

「帰るぞ」

「はあ……」廃校の敷地外に出た途端に吐き出されたのは誰のため息だろうか

颯のだったら殴ってやる

「これからどうするの？」

すると瑞葉が颯に支えらた生島（妹）を見る

何故いるのかと言えば、あのまま放置しておくと兄の保護の無くなったこの少女にどういったことが起こるか容易に想像できるので保護したというのがことの顛末だ

「あー、とりあえず俺の所で保護する」

まあ、仕方ないよな

瑞葉の両親は突然不良少女受け入れるなんて無理だろうし、颯は親衛隊が黙ってないだろうし

消去法で俺の所になるよな……

しかも家ってか屋敷には空き部屋がまだまだあるし

母親はこういうわけありの話が大好きだし

親父は『ついに女子にも武士を志す者が現れた』とか言って泣き出しそうだし

他にも……

ってちょっと待て！なんだこの変人の集まり！？

自分で言うのもなんだが、かわいそうだぞ俺！

「霧谷さんの家、ですか？」

するとやつれた表情の生島（妹）が弱々しい声でそう言ってきた

そりゃまあ不安だろうな

颯により強くしがみついているし

てか今の光景、親衛隊に見つかったら惨殺されるな

「大丈夫、颯も一緒だ」

ということで颯に丸投げ

なんか非難の目で見てきたが、コイツ俺に助けられた自覚がないのか？

誰がこれ以上助けてやるかよ

「私も行く」

いやいや、何故？

お前は帰れよ

「私も行くの！」

いや、だから何故？

ジー……

止めろ、凝視すんな

俺の瑞葉耐性じゃ大ダメージで心がぽっきり根本からやられる

っておい！うる目は反則だろ！

「私だけ……」

「わかった！わかったからもう止めてくれ！」

嗚呼、俺の心はなんて弱いのか

てか、俺の目の前であからさまにガッツポーズとか止めろ

心が死ぬ、灰になる……

「ただいま……」

あのあと心が死んだ俺は半ば瑞葉に引きずらるようにして無事に？帰宅

「あら、おかえ……「かくかくしかじかだからこの子の世話よろしく」

そして出迎えた母親に突然そう言う俺

「わかったわ、任せなさい」

そしてこんなので会話が成立してしまう我が家クオリティー

「あれってかくかくしかじかとしか言ってないよね？」

「うん、でも霧谷だから」

さすが瑞葉、よくわかっていらっしゃる

あ、なんか気づいた時には生島（妹）が颯から引きはがされてる

「こういうの久しぶりね。私、張り切っちゃう！ふふふふっ」

ズリズリ……

あ、強制連行もとい人さらい

母親の前に立ち塞がれる人間はここにはいないんだ

助けを求めても無駄だぞ生島（妹）

「それで、これからどうするの？」

生島（妹）が強制連行されるのを見送った後、瑞葉がそんなことを俺に聞く

何故俺？でもまあ……

「とりあえず……帰れ」

もう母親に預けたし二人共もここにいる意味ないだろ

てか居座られたら俺が迷惑だ

さっさと寝させろ

「わかっ……「嫌」

……何故？

「嫌じゃなくて帰れよ」

「嫌」

「だから帰れって」

「い・や・だ」

わざわざ一文字ずつ強調してきたよ瑞葉さん

これはもう、実力行使でいいよな？

「瑞葉……」

俺はわざとらしく明後日の方向を向いている瑞葉に近づく

「よっと……」

「え？ちょっと待……きゃあ！」

なにをしたのかと言えば、あれだ俗に言うお姫様抱っこだ

てか瑞葉でもそんな悲鳴あげるんだな

けっこう以外だ

「あう～」

なんか真っ赤になって唸ってるし

うわー、ちょっとこれ可愛い過ぎるんですけど？

めちゃくちゃ頭撫でてあげたい

っと、自重つうか自制

とにかくこうして家を出た俺達は敷地の一歩外、家の前の長い階段の上にいる

ちょうど日が暮れるところだったんで、なんとなくそれを眺めてる

俺の家は長い階段を上った高い位置にあるので、眺めはなかなかのものだ

拗ねた瑞葉が膨れて背中を向けてるのがなければ最高の眺めかもな？

「日が沈む……」

すると颯がほとんど見えなくなった夕日に向かって呟く

夕方の陰りのある表情でそんなことを言うと、妙に似合うんだよなコイツ

「さあ帰れ、早くしないと真っ暗だぞ？」

季節は夏だが太陽が沈めばあとは暗くなるばかりだ

そう言ってる間にもう夕日の紅は消えて暗闇が……

ピカッ！

「「……っ！」」

なんだ！？

突然視界が真っ白に……

……って、おい！

天使降臨とか言われても疑えないような神々しいつーか仰々しい光

の柱が目の前に！？

しかもあの場所は颯がいたはず！

さすがに『ついに後光が射したか？』とか冗談言ってる場合じゃ……

ん？待て待て、以外と焦ってないぞ俺

「えっと……颯？」

瑞葉もなんか困惑した表情で颯の名前を呼んでいる

ああ、わかった

光から危険性を感じないからだ

心配する必要は無いという思念？のようなものが光から伝わって来ている気がする

「なんか、大丈夫そうだな」

「うん……」

ヴンッ！

「なっ！？」

落ちる！？

は？意味不明だろ

ここ地面の上……

「嘘だろ……」

そうして下を見た俺は、足元に広がる漆黒の闇へ飲まれる自分の体を認識する

この闇には光とは真逆の冷たさしか感じない

俺の背筋は無数の虫が這うような不快感を訴えていた

ｓｃｅｎｅ０６（後書き）

ついに！ついに逝ってくれましたよ！

『へ？こういう飛ばされ方なの？』って思った人がいたら嬉しいなぁ

で瑞葉ちゃんですが……え？瑞葉瑞葉うるさい？そうですか……

その瑞葉ちゃ……

イテッ！ちょ、石投げないで！

ｓｃｅｎｅ０７（前書き）

ついに！ついに来ました異世界！

魔法に魔物にあれやこれ！

ニヤニヤが止まりませんなー（「▽」）

scene07

『起きろ』

煩い

『起きろ』

眠いんだよ

『起きろ』

……俺、なんで寝てんだ？

『起きろ』

俺、穴に落ちて……

「っ！？」

『やっと起きたか』

「誰だ！？」

俺は何故か重たい頭を上げて……上げてるのか？

感覚が……これは……

「くっ！」

『意識をしっかり保て、自身をしっかりと把握しろ』

なんださっきから……

老人のようなしわがれ声が……

てか言われなくても俺は俺だ

わざわざ把握する必要なんかないだろうが

……ん？楽に、なった？

『ふん、世話のかかる奴だ。まあいい、まずは自己紹介でもしておこう』

改めて顔を上げるとそこにはシワだらけの顔にくすんだ瞳、さらには汚れた白髪といったひどいなりの老人

けれどその存在自体が異常ななにかを放出していた

こいつは危険だ

そう判断するのには十分なほどに

『我が名はドッド、闇の研究者だ。まあ今の私はただの残留思念、いわばゴーストのようなものでしかないが……』

突然何を言ってるんだこいつは？

そもそも俺はなんでこんなことに？

『時間は少ない。要点だけを伝えよう』

ここは何処だ？颯は？瑞葉は？

『まず、お前には勇者とともに魔王を倒してもらう』

爺さんのよまい言なんか聞いてられるか

なにが勇者だよ……

『我が研究内容をまとめた本を読め』

あー夢なら覚めろ

頬っぺたつねってみるか……

『旅に必要な物は用意してある』

グニッ！

『そろそろ時間だ……では最後に巻き込んでしまたことを詫びよう』

あ？視界が霞む……

やっぱり夢……

『済まない、異世界の少年よ』

ん？……いせか、い？

～闇の淵～

『そこにいるのか？』

『もちろん』

『我が念願は叶った』

『そうだね』

『さあ、喰うがいい』

『わかった』
『悪魔よ、さらばだ』
『……うん』
『また一人』
『私は悪魔』
『一人だけ』
『おやすみ』
『悲しい人』
『ねがいが』
『かなって』
『よかった』
『……』
『えっとね』
『やっぱり』
『一人だと』
『さみしい』
『おねがい』
『誰か私を』
『見つけて』
『それまで』
『ずーっと』
『待ってる』

ｓｃｅｎｅ０７（後書き）

へ、変なキャラが……

当初の予定ではいなかったんだけどなぁ

まあいいや、瑞葉もヒロインじゃなかった……てかキャラ自体存在してなかったし

話すと長くなるので詳しくは活動報告で

ｓｃｅｎｅ０８（前書き）

爺さんキャラ薄っ！といまさら気づいた作者です

気づいたら悪魔っちのが目立っちゃってるし（―ω―）

今のところ三船＜颯＜悪魔≦爺さん―越えられない壁―霧谷≦瑞葉

（って主人公おい！？）な関係式を予定してるんだけどな～

空気颯頑張れ！でもそんな空気みたいなキャラは好きだ！

そして！

三船って誰よ？な方はｓｃｅｎｅ０２辺りを読んでぬ

scene08

「っ……ここは」

俺は……

なんで……

くっ！？

「瑞葉！はや……くしゅん！」

埃、うざい……

なんなんだよここは！？

俺がいる倉庫ほどの広さの部屋の床一面に絨毯のごとく厚い埃の層が出来てるってどんなだよ……

試しに歩いてみたらふかふかってわけじゃなかったが、足音をしっかり吸収しやがった

なんと言うか……

っと、そんなことよりまずは状況を確認しないと

とりあえず

「どこだ、ここ？」

あまり効果は期待できそうにないが外の様子を確認するついでに換気のために窓を開ける

周りには木しかなかった

そしてここは知らない場所だと言うこともわかった

なぜなら俺の住んでいた地域にはない、それどころか今まで見たことも無い木ばかりが生い茂っていたからだ

「誘拐？まさかな……」

さすがにあの光と足元に開いた穴を忘れるわけがないし、あれを夢だと思うほど楽観的ではない

そもそも誘拐したのなら手足が自由であるわけがない

「夢？」

なにか……忘れている？

あれは、穴に落ちた後？

たしか変な爺さんが……

「異世界？」

まさか、とは思えなかった

マンガや小説の状況と酷似しているし、ここがもとの世界だと思うことの方が不自然だと感じる

何故なのかはわからないが

「意味不明だな」

そう意味不明だ

自分で言っておいてなんだが、実際にそうなのだから仕方ない

勘ってやつか？

まあ手っ取り早くあの爺さんに聞けばいいのだろう

実際にいるのなら、だが……

あーなんか頭の中ぐちゃぐちゃになってきた

とりあえず、爺さんをさがすか

俺は鍵ない扉を慎重に開き埃まみれの部屋を出る

物音を立てないように、そしてわずかな気配を見逃さないように

あれから数分

結果を簡単に言うと……

「どこにもいないってどういうことだよ！」

まあ、こういうことだ

どうやらここは周囲を森に囲まれた小さな小屋で、部屋はさっき俺がいた倉庫以外に広い部屋が一つだけ

家具などは揃っているが全て埃を被り誰かがここで生活している様子はない

もちろん小屋の外にも人の気配はない

痛っ、埃が……

やべ、涙が止まらね

ああ！めんどくさいなあ、ったく！

「よし、考えるのはやめてとりあえず掃除だ！」

掃除しながら使えそうな物探して、ついでに考えをまとめる

よし、やるか

「ん？」

さっそくごちゃごちゃと用途不明の何かが乗った机をどうにかしようとしていると、あるものが目に留まった

黒の背広姿に魔法陣の描かれた一冊の本

「たしか『我が研究をまとめた本を……』とか言ってたな」

お？よく見たら食料に金、武器も机の上に揃ってんな

多分俺のために用意したんだろうから有り難く全部貰うか

サバイバルナイフを腰に、投擲用のナイフを一緒にあったベルトに吊し腰に巻く

本は同じようなちょうどいいサイズのポケットがついたベルトがあり、先のベルトと交差するように腰に巻く

そして丈夫そうなフード付きの枯れ葉色のロングコートを羽織り、さながらゲームの中の冒険者のような姿になる

あとは『灯火石（ライター）』だとか『微光石（ライト）』とか言うアイテムをコートに突っ込み、食料と金の入った袋を担げば準備完了

もうこの小屋に用は無いし掃除する必要無くなったな

ドサッ……

「きゃ！……ケホケホ、埃、酷すぎ」

この声！？

「瑞葉！？」

声は倉庫の中からだ

俺は埃が舞うのも無視して扉に走り寄り、勢いに任せて扉を開く

「霧谷！無事だっ……どうしたのその格好？」

そこには穴に落ちる前と同じ姿の瑞葉がいた

「あーこれはかくかくしかじかで……」

今回はちゃんと説明したぞ？

てか、瑞葉にそんなことしたら鉄拳が振り下ろされるっての

「……ってわけだけど、わかったか？ま、俺もわかってないんだけどな」

そういうわけで俺の国語力総動員で説明した

とはいえ内容が内容だけに支離滅裂な話になった気もするけど……

「常識で考えると馬鹿げてるけど、多分本当なんだよね……」

さすが理解が早い

こういう時冷静で焦らない瑞葉は尊敬する

ま、俺もそんなに焦らなかったけど……

掃除とかなんか意味不明なこと始めかけたしな

あー恥ずかしい

「ところで瑞葉、どうしてお前ここにいるわけ？」

穴に落ちたのは俺だけだったはずだけど……

「ああ、それは……」

ｓｃｅｎｅ０８（後書き）

瑞葉、来ちゃいました（てへっ☆）

決して瑞葉ちゃん好きだからとかではないよ？

ちゃんと決まってたことさ～

大丈夫『嘘だけど』なんて某犯罪者の息子みたいなこと言わないから（愛≧ω≦）つ

ｓｃｅｎｅ０９（前書き）

瑞葉視点って書きづらい……とぼやいている駄目駄目騎士団筆頭駄目騎士こと葉音です

え？スライム？

ふっ……それは私の第一形態にすぎん！

腐腐腐っ、私はあと三段階変人を！……ゲフンゴフン、あー変身を残しているのだあっ！？

scene09

一瞬だった

いきなり空から光が降ってきて、それに二之宮が呑まれて、でも何故か安心した

二之宮なら突然後光がさしてもおかしくないかもって思えて笑っちゃいそうなくらい

だって神様が贔屓したとしか思えないくらいの美少年だもん

しかも優しくって頭も良くて

私も昔は二之宮に憧れてたしね

あ、これは関係ないか

……でも

なんだか悲しかったんだよね

二度と会えない

そんな気がした

それで霧谷にどうしようって聞こうと思ったらさ、落ちてるんだもん

真っ暗な穴の中に

気持ち悪かったなあ、あの穴

不吉って言うかもうこれが諸悪の根源って言われても納得出来るくらい淀んでたから

それで思ったんだよ

助けなきゃ、って

それで反射的に私も穴に飛び込んだの

今考えたらよくあんなことしたな、って感じだよね

だってアレだよアレ

なんかウネウネしててグニャグニャしてるアレだよ

か弱い女の子が触るようなものじゃないよ

……なによその目は

ふんっ！どうせ怪力馬鹿ですよ私はっ！

えっ？か弱いじゃなくて壮麗？

それって褒めてるの？

コホン！

ま、それは置いといて

穴に落ちた私は真っ暗な場所にいた

上も下もわからなくて、誰もいなくて、とっても……不安、で……

グスッ……

と、とにかく！

誰かいないかと思ってずーっと歩いてたら声が聞こえたの

おじいさんみたいな渋い声と鈴みたいに儚い声だったかな

それで誰かに会えるかもって思って私は走り出したの

でも、いくら走っても何にも無い

正直おかしくなりそうだった……

声がするのに、そこにあるはずなのにって

それであきらめかけた

でも思い出した

私はまだやりたいことがあるって、こんなところであきらめられる

訳無いんだって

それで……悪、じゃなくて女の子に、でも無くて……

えーっと、あの……

ううっ……

とにかく！暗闇から脱出出来たの

えーあー……

なんというか……そうだ！

えっとね！私の強い思いが暗闇を打ち破ったのだっ……って信じてないでしょ！

な！？違っ……！？

霧谷のばかぁ！？

～暗闇の真実～

『ねえねえ』
「っ、誰！？」
『私は悪魔』
『あなたの』
『願いは？』
「私の……願い？」

『そうだよ』
『あなたの』
『願いは？』
「それは……」
『それは？』
「……霧谷に、会いたい」
『わかった』
「へ？」
『じゃあね』
『綺麗な人』
「えっ……きゃ！？」
『バイバイ』
『また今度』
『わたしを』
『呼んでね』
『ひとりは』
『さみしい』
『から……』
「……わかった」
『……え？』
「絶対また来るから！約束だから！だから！……泣かないで」
『……』
『わかった』
『ずーっと』
『待ってる』
『優しくて』
『綺麗な人』

はあ～霧谷にこんなこと言えないよね

……それにしても

あの子ってどうやったら会えるんだろ？

ん～さっそく大問題発生？

ま、方法がなくても絶対会いに行くけどね

それにしても霧谷と二人で魔王退治かぁ

んーと、あれしてこれして、それから他にも！

えっと、あとは……ほわっ！？

ちょ！？私、何考えてっ！？

ふにゅー

とりあえず

頑張ろっと……

異世界ってのが不安だけどね

でも、きっと霧谷が守ってくれるよね？

あの時みたいに

ｓｃｅｎｅ０９（後書き）

悪魔っち『』←コレに四文字だから書くの大変

何故にそんな設定作ったし……

しかし今回も瑞葉ちゃ……うわ！こら！あからさまに耳塞がないで！

ｓｃｅｎｅ１０（前書き）

更新は週に一度か二度にしますゆ～

そろそろ一章約２０００字はキツイかもしれないなぁ

なんか説明不足感が無きにしもあらず……

内容が物足りないと思ったらいつでも言ってくりよ（―ω―）／

scene10

なにが『暗闇を打ち破った』だこの馬鹿は

下手したらあの暗闇に永遠に閉じ込められたかもしれないってことだろうが

「……はぁ」

ああ、思わずため息が

異世界に来て早々、こんな調子でいいのか俺？

なんか幸先悪い、つか激しく不安だ

それにしても

「……無事でよかった」

「ん？なにか言った？」

「いや……」

まあ瑞葉が来てくれたのは嬉しいんだが

さすがに異世界を一人で旅するとかつらすぎからな

とにかくまずは目標決めないと

「瑞葉、これからどうする？」

最終目的は魔王退治……いや、元の世界に帰ることだとして

どこにいるかもわからない勇者を見つけて魔王退治に行くとはさすがに抽象的すぎる

「やっぱり、情報収集かな？」

ま、そうだよな

「そうなんだけど問題は情報収集する場所、つまり街がどこにあるかなんだよな」

なんか世界地図とか無いのか？

ということで、俺はアイテムの詰まった袋の中身をひっくり返すことに

「あ」

お？瑞葉が何か思いついたらしい

「そういえば、勇者って二之宮じゃないの？」

へ？

……颯？

いやそれは、ん？でも……

じゃああの光はまさか

「有り得るな……」

「でしょ！」

いやいや嬉しがることか？

褒めろと言わんばかりに見つめられても困る

それにしても颯が勇者か……

光の剣に銀の鎧

ちょっとまて、似合いすぎだ……

ま、それはひとまず置いといて

どうせこの世界でもハーレムしてなんだかんだでうまくやるんだろう

多分ほっとくても大丈夫だ

ただ

目の前でふくれてる瑞葉はほっといて大丈夫なんだろうか？

いやしかしかけるべき言葉がわからない……

「あ……」

「なに！」

いや瑞葉関係ないから期待に満ちた目を俺に向けるな

俺の心が痛む

「……いや」

うっ……落ち込むなよ

これじゃ『そういえば本が有るんだ』なんて言いだせないじゃないか

用意周到な爺さんだから多分なんか役に立つこと書いてあんだろ、
と思ったんだが……

「む～」

あの瑞葉、ふくれられても困るんだが……

あのな、可愛いのは罪だぞ？

それ、俺の理性が激しく揺さ振られるから辞めてくれ……

しかし、どうしよう

せめて瑞葉が目を逸らしてくれれば逃げれるんだが……

「クスッ、霧谷……可愛っ」

「な……！？」

は？可愛い？俺が！？

いやいやまてまて！

俺はそんな童顔とかではない！……はず

「あれ？霧谷、顔真っ赤だよ？」

ん？瑞葉がクスクス笑って……

ってことは！

「瑞葉……」

ああ、つまり冗談だな

フムフム理解した

全く本当に瑞葉という奴は……

「瑞葉も可愛いよ」

「はふっ！？」

はふっ？……ってなんだ？

まあいいや、予想通り瑞葉への仕返しが成功したことだし今からゆっくり読書に励もう

しかし魔法か……

俺の腰にぶら下げられた黒表紙の一冊の本

こんなもんにその知識が詰まっている……かもしれないんだよな

ったく、あの爺さんめ

むやみやたらとめんどくさいことに巻き込んでくれたな

だがまあ今はなに言ってもしかたない

「うむ？なになに……」

今はひとまずこの本だ

てわけで、部屋を移動し埃を払った椅子に座った俺はさっそく本を広げてみる

目次には『旅の心得』『精霊魔法』『四属魔法』『概念魔法』『召喚魔法』『時空魔法』とあった

今必要なのは『旅の心得』、これだろうな

えーっと……

「お、意外と近くに街があるな」

あとは……ギルド？

なんだ、それ

説明は……なになに？

「ギルドマスターには話を通してある。資金調達や情報収集のためにギルドに行け？詳しい話もギルドマスターに聞け……だと？」

テキトーだな……

まあたしかに口頭で説明してもらったほうがわかりやすいが……

「とりあえず最初の目的はこのギルドマスターに会うことだな」

距離もたいしたことないし、三日も歩けばたどり着けそうだ

これなら瑞葉でも平気か？

しかし……

魔物注意、これが非常に気になる

もし俺が考えてるような魔物が出てくるなら、今の装備じゃちょっとまずいな……

この辺りは比較的弱い魔物が多いとあるが、そもそも比較するにも基準がなくては困る

比較対象が元の世界で言うドラゴンとかだったら比較的弱くとも十分強いだろうし

とりあえず簡単な魔法でも使えるようになってから出発したほうが良さそうだ

しかし刀があればな……

それなら魔物なんか気にしないでいいんだが

無い物をぐだぐだ言っても仕方ないしな

じゃあ瑞葉にもこれ説明するか

……不機嫌になってなければだが

ｓｃｅｎｅ１０（後書き）

どうも、瑞葉ちゃんに『はふっ！？』な作者です（≧ω≦）

そろそろ魔法が登場するのでテンション高いぜっ！

と、言うわけで魔法を募集

カタカナでも漢字でもいいから厨二全開の魔法を具体的な効果の説明付きでよろしく

何故ってそれはめんど……ゲフンゴフン、作者の語彙力ではいい名前が浮かばないからです

ｓｃｅｎｅ１１（前書き）

早速魔法を考えてくれた方がいましたよ～

感謝です（≧ω≦）

ただ霧谷はもちろんアレ、瑞葉はこの章でわかるし、颯ももちろんアレ

なんで誰に、またはどんな奴に使って欲しいかも書いてくれると嬉しい

モンスターでもいいよ～

scene11

「へー」

「……本当にわかったのか？」

あのあと、ぶすっとした表情で殺気混じりの視線をぶつけてくる瑞葉に簡単な説明をする

魔法って言葉にも反応しなかったし相当ご立腹らしい

まったく、困ったもんだ

「じゃ、早速魔法の練習するが……どうする？」

「……後でやる」

はいはい、後でね……

ったく、瑞葉め

そんなこと言ってる場合じゃないってわかってないじゃ無いのか？

「……わかった、俺が悪かったから機嫌直せ」

あー何故俺が謝ってんだか……

原因は瑞葉に……

ん？いや、俺もけっこう悪いかも？

「……謝ってほしいわけじゃない」

……は？

いやいやまてまて、謝ってほしくないならどうしてほしいんだよ

まさか謝っても許さないとかじゃないだろうな……

いやまて、瑞葉ってそんな過激キャラじゃない……はず

まさか俺、そんなに瑞葉怒らせるようなことしてたのか？

そんなはずないんだが……

って『はず』ばっかりだな

なんか自信無くなってきた

「霧谷に……」

ん？俺に？

「霧谷には！……その、軽い気持ちで、か、可愛いとか……えっと、言ってほしくない、から……」

……ん？

つまり？俺に嘘をつくなと？

いや、それなら……

「あれ、一応本心なんだけど？」

というか瑞葉を見て可愛いと思わない奴がいるなら見てみたいぞ？

「ふえっ！？」

……ふえっ？

なんかまた変な宇宙語が出て来たな

瑞葉って実は天然なのか？

十年以上の付き合いなのにいまさらな発見だな

うむ、クールな瑞葉のイメージがだんだん崩れてきてる……

「じゃ、何も問題無いか？」

「え！？あ、うん……」

ん？まだなんかあるか？

瑞葉がまだ睨んで来るんだが

「どうした？魔法の練習行くぞ？」

「うん、ただ……（気付け！鈍感馬鹿霧谷！）」

お？なんか寒気が……

こっちの季節は冬なのか？

よし、これもギルドマスターにしっかり聞いとこう

「ところで瑞葉、その格好寒くないか？」

コート着てる俺が寒いんだからな、ノースリーブの瑞葉は多分もっと寒いだろうからな

「平気だけど？」

え？寒くないのか？

じゃあこの寒気はいったい……

って、あら？もう寒くない？

「……まあいいや、じゃまずは精霊魔法って奴からやるか」

えーっと、精霊魔法は……

精霊魔法とはその名の通り精霊に干渉することである

それゆえ魔法は精霊の力によって効果が著しく変動し、その効果も『火を出す』等の単純なものに限られる

しかし精霊に干渉することがたやすく、凡用性が高いために一般に広く普及している

主な精霊は火→サラマンド、水→ウンディーネ、風→シルフィード、土→ノームである

ただし火中ではウンディーネに、水中ではサラマンドに、空中では

ノームに、地中ではシルフィードに干渉出来ないので注意する
また干渉する際には精霊ごとの喚起詠唱が必要である
『天を焦がす勇猛な火の眷属よ我が呼び声に応えよ』
『天を満たす冷酷な水の眷属よ我が呼び声に応えよ』
『天を翔ける奔放な風の眷属よ我が呼び声に応えよ』
『天を築きし堅牢な土の眷属よ我が呼び声に応えよ』

「……だそうだ」

なんか楽そうだな

とりあえず水だけ出せれば十分だろ

「天を満たす冷酷な水の眷属よ我が呼び声に応えよ……」

さて？どうなる？

『ヤッホー、私を呼んだのは少年？』

……は？

ちょっと待て、なんだこの半透明の青くてちっこいのは？

姿は人間の女性なんだが、なんせ手の平サイズでお手頃サイズ

「こんなのが精霊？」

まっさかー、な心境になってしまうわけだ

「へー精霊ってこんな感じなんだね」

いやいや順応力高すぎだろ瑞葉

こんなのだぞ？頼りなさすぎだろ……

『主よ、これでも私は上位精霊だぞ？こんなのではない』

こんなちっこいのにか？

『ん？今なにか失礼なこと考えなかったか？』

おお、さすが上位精霊って違うか……

「まあいいや、何が出来る？」

とりあえず旅に必要な水が確保出来れば十分なんだが……

『ふふん、水ならいくらでも出せるぞ』

ちっこいのに胸張ってもわかりにくいっての

だがまあいくらでも、か……

なら十分だろうな

「わかった、もう帰っていいぞ」

他の精霊はもうやらなくていいだろ

『アイサー……あ、これは忠告なんだが、少年は私達水の眷属との相性はいいが他とは酷く悪いようだ。とくに火の眷属とは最悪だな。用がなければ出来るだけ呼ばないほうがいいぞ』

水の精霊はそう言い残すと逆巻く水に覆われ、水が消えた後には何も残っていなかった

やっぱりあれが精霊なんだろうなぁ

しかし水だけか、得に不満はないな

ところで瑞葉は……

「なにやってる？」

俺の目には赤、青、白、黄の他に緑やら黒やらいろいろいっぱい見えるんだが……

「えーっと、みんなが喚起詠唱教えてくれたから……つい」

ついってなんだついって……

明らかヤバそうな雰囲気の精霊までいるのはどういうことだ？

「つまり精霊に気に入られたと……」

で、精霊に嫌われてるらしい俺は多分関わらない方がいいと

そういうことか？

「じゃ先に四属魔法ってのやっとくから、さっさとそいつら帰せよ」

「うん、わかった」

ああ、俺もしばらく帰す気がないってのがよくわかった

なに幸せそうに精霊で遊んでやがる

……別に、羨ましいわけじゃないぞ

俺は本当に水だけで十分だと思ってるからな

本当に本当だからな！

あの猫みたいなの（ケット・シー）呼んでみたいとか思ってなんかないからな！

ｓｃｅｎｅ１１（後書き）

霧谷が鈍感炸裂させてますね～

んー不自然な鈍感になってないかな？

ちなみにサラマンドやウンディーネは属性ごとの最高位精霊の名前で、霧谷が呼んだのは水の上位精霊で名前は無し

ｓｃｅｎｅ１２（前書き）

さて、いよいよ魔法なわけですが、元の世界で魔法が使えない理由は説明するととてつもなくめんどくさいことに……

どうしても知りたいって人がいなければ割愛したいなぁ、と思う駄目作者です

scene12

「四属魔法はっと……」

ちなみに俺は幸せそうに精霊達と談笑してる瑞葉を置いて屋外にいる

決して猫みたいなのが気になって仕方がなかったわけではない

ただ瑞葉の話し声のせいで集中できなかっただけだ

誰がなんと言おうとそうだ

「ふむ、まずは魔力計で属性を調べるのか」

えーっと魔力計は……これか？

形は長方形をした何の変哲もない透明な板で、使用法は左右の端を握りただ魔力を流すだけらしい

そもそも魔力ってなんだ？って感じだが、多分こっちの世界に来てから感じてるコレだろう

ただコレ掴み所が無い

何度か引き出そうと試したんだがなかなかうまく行かない

「困った……」

やっぱりイメージが大事っていうお決まりのパターンか？

でも、魔力を引き出すってどんなイメージだよ

「さっきの精霊に聞いてみるか」

頼りないけど……

『ヤッホー』

……は？

『さっそく私に会いたくなったか、主よ？』

おい、俺まだ呼んで無いぞ！？

てかなんだそのあたかもお前に魅力があるかのようなうざい発言

『主に貰った魔力をまだ消費して無いから、消費するまでしばらく呼ばれなくても出てこれるのだよ。あとうざいとか言うな！』

「そうなのか？」

『そうなのだ』

てか、なんで心の声まで聞こえてんだ？

『精霊は精神体に近いから、喚起主とは心で繋がっているのだ！だから私の声は他人には聞こえないぞ。嬉しいか？』

ふむ、心の声が伝わるのはわかったってことにしとこう

だが、なんで俺が嬉しいんだ？

『だって私を独り占め出来るんだぞ？』

……だから？

『こんなに可愛い私だぞ？』

……どこが？

ただのチビガキじゃないか

『な！私はチビガキじゃない！』

じゃあなんだよ？

青くて透けてるちっこいまな板二次元精霊さん

『うわー！主は鬼畜だ！変態だ！私はちっこいけどまな板じゃない！それに二次元でも……ん？二次元ってなんだ？』

ああ、二次元ってのはとっても可愛い（オタクの）みんなに愛され

る美少女ってことだ

『ほんとか！主、大好きだ！変態とか言ってゴメンね！』

……ああ

ところで、魔力の使い方を教えてくれ

『魔力？ああ……主は魔力弁が閉じているな。内力系の魔法ばかり使っていたのか？』

内力系、ってなんだ？

『魔力を溜め込み瞬間的に放出する魔法だ。逆に外力系は安定して魔法に魔力を送り続けることだ。しかし主の魔力でそんなことをすると大変なことになるはずだが……』

瞬間的に、って言うともしかして刀を振る時のあれか？

なら波紋を広げたままにすればいいってことか……

『待て、主の魔力で突然閉じていた魔力弁を開くと大変なことになる』

じゃあどうするんだ？

言っとくが、ちょっとずつなんて器用な真似は出来ないからな

『心で繋がっている私は主の魔力弁が閉じていても魔力が取り出せる。だから主の魔力を私が取り出すのだ』

それってお前は大丈夫なのか？

雰囲気的にとんでもない量の魔力なんだろ？

『大丈夫だ。この世界で姿を保つことにほぼ全ての魔力を費やしているが、私の精霊界での本来の魔力は主の数倍だ』

つまり心配いらないと？

ていうか、お前も異世界から来てるのか？

『異世界？なんだ主は渡り人か』

渡り人？知ってるのか？

『うむ、しかし精霊界は異世界ではなく表裏世界だ』

なにが違うんだ？

『全然違うぞ』

だからなにが？

『教えたら怒られるから駄目』

む……

『ただ世界を渡るのは私でも無理だぞ主よ』

そうか、もしかしたら帰れると思ったんだがな……

『とにかく！魔力を取り出すから、私がいいと言ったら魔力を解放するんだぞ』

ああ、よろしく頼む

『おう、任せなさい』

……お、魔力らしきモノがどんどん減ってる？

やっぱりコレが魔力か

てか元の世界にも魔力ってあったんだな

つまり三日月や四葉陽炎、七閃とか全部魔法だったってことだよな？

まあ、たしかに四葉陽炎の一度の斬撃が四つの剣圧になる、とか普通じゃ有り得ないしな

親父は『念』だって言ってたが……

『主、もういいぞ』

さて、やるか

波紋は、広がる……！

リィィーーン！！！

「んなっ！？」

おい待て！魔力取り出したんじゃないのか！？

『ん？取り出したよ』

じゃあなんでこんなんなってんだよ！？

俺を中心に水色の光と黒色の風が吹き荒れてるんだが！

しかも地面の草とか一部凍り始めてんだが！

普通こんなになるのか！？

『普通は体がぼんやり光くらいだが、主はそれが普通だ』

なんだそれ、俺ってどんだけ規格外なんだよ……

って、これどうすればいいんだ？

『普通の人間は魔力弁を少し閉じて、ガス抜きでたまーに魔法を使ってれば大丈夫だけど……』

……どうせ俺には無理なんだろ？

『無理、というか……ただのガス抜きが他人にとって危険すぎる破壊力を持ってるからね』

つまりどうしろと？

さすがに垂れ流したままってのは無理だろう？

『必要な時以外、私が魔力を吸収しようか？』

……つまり、これからずっとお前の相手をしろと？

『うん、どうせさっき取り出した魔力のせいでしばらく消えれないしね』

マヂか……

『マヂだ』

……まあいいや

これからよろしくな、まな板

『まな板違う！私は上位水精霊ウエルド！ウンディーネ様の次に偉いんだからな！』

はいはい、わかったわかった……

じゃあよろしくなウェル、霧谷雨月だ

雨月って呼ぶなよ？

『ウェル……まあいいや、なんで雨月は駄目なのだ？』

なんか女の子みたいだろうが

しかも雨月って呼ばれると颯の顔思い出すからムカつく

『ふぅん……』

そんなことより、魔力計使ってみるか

えーっと、魔力を流して……

お、透明だった板が青と黒に変わった

つまり？

『水属性と闇属性だな』

予想通りだな……

で、属性調べたら……

『あとは詠唱で魔法の骨格を組み上げ、魔力で肉付けするだけだね』

詠唱は……

『初級で実践的なのは【怜悧な氷の刃よ猛りし者を安らかなる眠りへ導け、氷刃】かな？』

ウェル、お前……実は役に立つんだな

『実は、ってなに！』

「えーっと、怜悧な氷の刃よ猛りし者を安らかなる眠りへ導け『氷刃』」

おお、凄っ……

幅１ｍくらいの氷の刃がスパッと遠くにあった木をぶっ倒ってる

『だから実は、ってなに！』

……次は概念魔法か

『こらぁ！無視するなー！！』

ｓｃｅｎｅ１２（後書き）

あれは間違いではありません

とだけ言っておきます

ｓｃｅｎｅ１３（前書き）

平日に更新出来ない……

でも、なんとか頑張りますよ～

以上最近瑞葉ちゃんが出ないせいでうずうずしてる葉音でした

scene13

次は概念魔法か

『概念魔法とは魔力に思い通りの形をとらせることだね』

つまり？

『堅い壁という形にして防御したり、肉体を強化するという形にしたり、万能な魔法だよ』

……で短所は？

まさかそんな便利な魔法がノーリスクとか有り得ないよな？

『うみゅ？燃費は最悪だし効果は四属魔法以下だし、万能だけど便利じゃないぞ？』

うむ、そんなもんか……

てか概念魔法ってもとの世界での『念』と一緒だと思うんだが、気

のせいか？

もしそうならわざわざ練習する必要ないよな？

ということで

さっそく、次行ってみよー

『主よ、気持ち悪い……』

む、失礼な

ちょっと欝になりそうだからテンション上げてみただけだろうが

これでも一応、異世界トリップで精神する減ってんだからな

『……っ！？』

まあ、嘘だけど

『は……？』

じゃあ召喚魔法の解説頼む

『……』

どうした？

『主よ……』

なんだ？

『帰っていいか？』

なんだ急に？

てかさっき帰れないって言ってなかったか？

『主に貰った魔力を全て消費すればいいの。大丈夫、ここらへん一帯が水没するだけだから』

いやいや何が大丈夫だ

いろいろと多方面に向けて大迷惑だろうが

それに……

俺にはウェルが必要だ

『なっ！？』

この世界に来たばかりで右も左もわからないし、魔法だとかファンタジーの世界が現実になって頭が痛いんし

だからこの世界を俺に教えてくれるウェルは必要で、とても大事な人……じゃなくてえーっと、精霊なんだ

『主わ絶対、心当たりがないのに女子に殴られたことあるだろ』

うっ、何故それを……

『思わせぶりとか女の敵だな』

ん？なんて言った？

『いや……主の連れは苦労してるんだろうなあと思っただけ』

いや瑞葉に苦労してるのは俺なんだが……

そもそも瑞葉を泣かせたりはしてない、はず

それに殴られてもいないぞ

『……末期』

なにがだ？

てか機嫌直ったかウェル？

さっきみたいに消えるだけならいいが、絶対に帰るなよ

俺はお前を頼りにしているんだからな？

『はいはい、どうせ主の命令が無いと帰れないんだからね』

そうなのか？

『そうなのだ』

あっ

『なんだ主よ？』

さっきから気になってたんだが、なんで俺が主なんだ？

霧谷で構わない……というか主って呼ばれるのが嫌なんだが

俺はべつにウェルの主人とかじゃないだろ？

あの召喚魔法とかいう奴で呼び出したりしてないし

『ふゆ？主は主だぞ？』

だから何故？

『主とは従うに値すると判断した相手への敬称だから』

敬称？てかそれってつまりウェルが俺を認めたってことだよな？

でも敬称は辞めてもらいたい

そもそも俺は敬称をつけられるような人間じゃない

それに自分が自分を認めていないのに敬称とかあまり嬉しいことじゃないからな

『むー、そんなに嫌か？ならキリたんとかうーちゃんとか……』

それはやめろ

『なんでだ？可愛いだろ？』

お願いだからやめて下さい

『仕方ないなぁ……じゃあキリキリで』

なにがじゃあだ、なにが

なんかストレスで腹痛くなってる奴みたいじゃないか

『駄目か？じゃあ……』

もういい……霧谷って呼べ

『やだ』

……何故？

『主が私をウェルって呼ぶから、私も主を愛称で呼ぶ』

じゃあウエルドって呼べばいいのか？

そうとう発音しにくいから嫌なんだが……

『ウェルって呼べ、あとキリならいいか？』

……なんなんだまったく

『よし、キリで決定だな』

おい、ちょっと待てまな板

なに嬉しそうに跳ね回ってやがる

『貧乳はすてーたすだ！希少価値だ！』

何故それを……

『シルフィード……様がいっつも、いっつも、いつもいつも四六時中自慢してくるから水精霊全員で考えたのを思いだした』

おいおい、シルフィードってどんな奴なんだよ……

『私の可愛いらしさを全部胸部の脂肪に回したような乳牛だ！』

ウェルのってことは……

それって相当デカイんじゃ……

『不細工だけどな』

おいおい、風の精霊ってずいぶんと想像と掛け離れてんだな

『シルフィード、様以外の風精霊は腹黒いけど可愛いよ？』

腹黒いのか……

『腹黒いのだ』

まあいいや、話は戻るんだが……

ウンディーネの次に偉い精霊に認められたってのは喜んでいいのか？

イマイチ精霊に認められることの過ごさがわからないんだが

とくにウェルを見てると精霊の神聖なイメージがボロボロと二倍速で崩れていくぞ

『なんかムカッてする……』

なんかムカッてするように言ってる

ウェルって見てるといじりたくなるんだよなぁ、うんうん

あれだ、気になるあの子につい悪戯してしまう男子の心境だな

『キリはただの加虐趣味だ』

そんなことより、どうなんだ？

『ん？あぁ、それは喜んでいいぞ』

そうか、ありがとなウェル

『……今度は何を』

なんだよ、今回は何も他意はないぞ

普通に認めてくれたことに感謝してんだからな

『……笑うのは反則だな』

ん？なんか言ったか

『なんにも』

ｓｃｅｎｅ１３（後書き）

うーちゃんとは霧谷の母親が霧谷を呼ぶ時のです

ちなみに父親は息子で、じじいはムーンボーイ

ちなみにじじいは霧谷の父親をクロノスボーイ、霧谷の妹をフロストガールって呼びます

さて父親と妹の名前はなんでしょう

ちなみに母親は妹をひーちゃんと呼びます

ｓｃｅｎｅ１４（前書き）

瑞葉ちゃんの苗字ってなんなんだろう？

最近素直に本気で悩んだ……

苗字の無いヒロインってどうなのさー

scene14

次は……

『召喚魔法は無理だ』

なん……

『特殊な魔法陣とかいろいろ必要だから無理』

どこ……

『それなりに大きい国の首都にでも行かないとないだろうな』

それ……

『近くには小国しかないな』

おま……

『さっきの仕返しだから気にするな』

あのなあ……

『にゃははーゴメンゴメン、もうしないよ』

はあ……

じゃあ次は時空魔法な

『じくう魔法ってなんだ？そんな魔法ないぞ？』

は？いやほらここに……

『時空魔法』とは時、空間を統べる最強の魔法であり、神を冒涜する最悪の魔法である

って書いてあるだろ？

『な！詳しく見せろ！』

な、なんだ急に……

ウェルが知らない魔法があるってそんなに大事なのか？

そんなに焦って本めくったら破れるだろ

てか、精霊って物に触れるんだな

幽霊みたいにすり抜けるもんだとばかり

……おい、ウェル？

『うるさい』

……なんか深刻な内容っぽいな

ウェルが本にかじりついてる間に、ちょっと瑞葉の様子でも見に行くか

……べつに、ウェルにうるさい言われたのがショックだったわけで

はないぞ

精霊相手に青春出来るような危ない性格はしてない

「あ、そうだ……」

一応概念魔法使ってみるか

いざ使おうってとき出来なかったら恥ずかしさで死ねるもんな

とりあえず……

「防御系が欲しいな」

ウェルいわく水属性の防御魔法は物理攻撃との相性が最悪で、そこは概念魔法の方がまだましらしいからな

しかしこの魔法便利過ぎる

たしか魔力で膜を作ってそれを硬い壁だと思い込むだけだからな

しかも詠唱無しときた

これだけの利点を帳消しにするほど魔力消費が激しいのか？

「……やってみればわかるか」

とりあえず体内に満ちている魔力の末端を掴み、体外に引っ張り出して操る

まあ刀に念を送り不可視の力が刀身全体をムラなく被うあの感覚とだいたい同じだ

今回は刀という明確な目標がないせいで少し戸惑ったが、空間把握能力には自信がある

何回かやれば馴れるだろ

「硬化」

そしてなんとか壁の形に仕上げた魔力に硬化しろという意思を送る

……うむ、目立った変化がない

相変わらず水色の絵の具に黒をほんの少し混ぜたような明るい色なんだが影のある、そんな不思議な色合いの魔力が揺れていた

そういえば瑞葉の属性ってなんだろうな？

色んな精霊呼んでたしまさか全属性扱えたりして……

いやでも瑞葉が魔法使いやってる姿とか思い浮かばないな

だがまあとりあえず、瑞葉の属性は後で確かめるとして、今はこの魔法をなんとかするのが先だ

「石でも投げてみるか」

手頃な石はっと……

おっ、あった

流線型の胴体から鋭利な刃のような突起を生やした、滑らかでけれどそれだけにおさまらない……

って何をやってるんだ俺

だってウェルがいないから俺がボケないといけない雰囲気だったんだ

って誰に弁解してんだよ

てかボケはお前だろうって声が聞こえた気がするぞ

幻聴か、幻聴なのか！

だが、たとえ幻聴だとしても俺は断じてボケではないと声高に主張したいっ！

……さて

一人ボケツッコミはここまでにして……

ん？瑞葉もウェルもいなくて寂しいんだろって？

そ、そんなわけないだろ！？

べ、べつに二人がいなくたって平気なんだから！

そりゃ……

いてくれたほうが、その……

嬉しい、けど……

ってなんだこのツンデレは！？

大概にしろよ作者！

……とにかく

俺は拾った石を振りかぶり、高く掲げた腕を鞭のようにしならせて投石する

さすがに音速を越えて空気を破裂させたりはしないが、物理攻撃としてはそれなりの威力をひめた弾丸もとい石ころが壁にぶちあたる

べっきぃ！！

そして壁はそんな某有名タレントの名前みたいな音を立てて、見事……

見事、綺麗に二等分されていた

本当に石ころ投げつけて叩き割ったとは思えないほど綺麗に割れた

むしろなんだか清々しい

ミシン目で綺麗に切れた時のような爽快感に溢れている

なんせ、ウルトラ上手に割れましただから

何が悪かったのか、よりも何故ここでモン狩なのかが問題だ

某リア充追求部のまっどさいえんてぃすと（あえてひらがな）なら

分かるだろうか？

『それは主様のイメージが弱いからなのでし！』
『それは主様の妄想の力が弱いからなのでふ！』

「はっ？」

何、お前ら？

なんかウェルをロリコン好みに調整した感じの幼児体型がニ……匹出て来た

『幼児体型言うなでし！』
『ロリコンてなんでふ！』

ウェルの子供、なわけないか

なんかウェルが絡んでる気配をバシビシ感じるが、ウェルはいいやつなので危険はないんだろう

『お姉様を呼び捨てにするなでし！』
『お姉様の子なんてはうっ！でふ！』

てか二人目の発言はボケを狙ってるんだろうか？

そこは俺のポジションだぁ、と言えばいいのか？

ネタを引きずるなよ

誰とは言わないが……

しかしイメージねぇ……

よくある魔法にはイメージが一番大事だというあれか？

……この小説もついにベタな設定を採用してしまうのか？

なんか他に設定思いつかなかった、っていう心の叫びが心の外角低めをぎりぎり掠らずにボールになった気がした

多分木の精だ

いたずら好きの妖精だ

「イメージねぇ……」

『でし！』『でふ！』

まあ、やってみるか……

ついでに試してみるか

どっかの馬鹿が何度も同じネタ繰り越すのをみて思いついたから、あまり乗り気はしないが

「積層魔障壁」

俺は先程よりも薄い壁を作り上げると同時にその内側にまた同じ物を作り上げる

そしてそれを繰り返した結果幾重にも重なり強度を増した壁が完成した

イメージで効果が決まるなら厚さなんて関係ない

それならやや効果が薄まっても同じものを何枚も重ねた方がマシ

むしろその方が頑丈だってイメージしやすいから、完成すれば強度は跳ね上がる

積層魔障壁が頑丈ならそれを構成する壁も頑丈で、それが頑丈なら積層魔障壁はもっと頑丈っていう一種の自己暗示だな

「俺って天才」

ま、冗談だが……

『すごいでし……』
『惚れたでふ……』

お、おぉ……

まさか俺、本当に凄いことしてしまったのだろうか？

……ってちょっと待て二人目！

『お姉様ぁ、一大事でし！』
『霧谷様ぁ、大好きでふ！』

だからちょっと待てー！？

ｓｃｅｎｅ１４（後書き）

『でし』と『でふ』登場

今後登場予定あんまりない

あんまりってことはほとんどない

つまり花咲太郎と同じ性癖の方げめんなさい

ｓｃｅｎｅ１５（前書き）

お久しぶり（ °▽° ）／

ロリっ子精霊……

scene15

『うるさーい！』

スパパンッ！

『あでし！』
『ひでふ！』

おお、妙技二段ビンタ

一度で何故か二回ヒットするいろいろと謎の多い攻撃だ

『キリ！』

ん、なんだ？

なんかわかったのか？

『時空魔法は危険だ』

お、予想通り

『だが……』

だが？

『キリが元の世界に帰れるかもしれない』

……マジか

どうやるんだ？

『キリの持つ魔力の約千倍の魔力さえあれば理論上は可能だ』

千倍か、キツイな……

『……あんまり残念そうじゃないね』

そりゃ颯見つけて魔王退治するまでは帰らないしな

それまでになんとかすればいいわけだし

当分先の話を今の内から騒いでも仕方ないだろ

『うみゅ……』

どうした？

『いや、時空魔法は神の反感を買うかもしれないんだ』

神の？

『そう、時空魔法は時と空間を支配する』

ふむ、そのまんまだな

それで？

『どちらも人に許された力を超えているの』

人に許された力？

『そう、神は人間に光を世界に闇を与え、人間は光から四属を取り出し世界は魔物や魔神を生み出し光と闇の均衡を保った』

つまりそれが人に許された力か

いやまて、じゃあなんで俺は闇属性なんだ？

『人間は闇にも染まったから、いや正確には闇に染まって人間になったから』

つまりなんだ？

『神は人間がこれ以上力を持ち、世界との均衡が崩れるのを恐れている』

だから時空魔法が広まるのはよろしくないと、そういうことか？

『そういうことだ』

じゃあ人前で使わず、本を誰にも見せなければ大丈夫なのか？

『多分……』

じゃあ、ウェルが必要だと思うことだけ教えてくれ

『わかった』

おう、頼む

『やっとでしか？』
『エッチでふか？』

『待ちわびたでし』
『焦らされたでふ』

あーそういえばいたなコイツら

相変わらず二人目はなんなんだか……

『二人とも、やたら早かったけどちゃんとキリに概念魔法教えたの？』

お、やっぱりウェルの仕業か

『ん、迷惑だった？』

いや……

『お姉様！霧谷様はすごいでし！』
『お姉様！霧谷様は萌えるでし！』

おい、割り込むな

『積層魔障壁が凄すぎるのでし！』
『硬くて大きくてエロいのでふ！』

黙れ二人目

『な、な、な！？』

いやまて落ち着けウェル

『いや、うむ……あうぅ』

落ち着けって言ってんだろ

『はぅ、心の準備が……』

いい加減に……

しやがれ！

スパパンッ！

『ひゃう！』

『おお、妙技でし』

『あん、イクでふ』

お前らはちょっと黙れ

『同一視されたでし！』
『見ちゃらめぇでふ！』

はぁー

ウェル、こいつ黙らせろ

『はぅ！そんな……』

なにがどうなったらそんな反応になるんだ

いいからさっさと精霊界とかに帰せよ

『あ、そういうこと』

……他に何がある

『まだお姉様と話してたいでし』
『まだ一夜を共にしてないでふ』

だれがチビガキなんかと一夜を共にするか！

『わ、私ならいいのか』

そういう問題じゃなーい！

『クスッ、冗談だよ』

『子供でし』
『うぶでし』

ほう、そんなに痛い思いがしたいか……

『い、いや……遠慮する』

『ちょっと！私はなにも悪くないでし』
『初めてだから優しくして欲しいでふ』

連帯責任だ

ぐわしっ

『ふにゅ！』
『髪掴むなでし！』
『あぁんっでふ！』

星になれっ！

『キャー！』
『なんで私もでし！』
『あん、快感でふ！』

ふーやっと静かになった……

「疲れた……」

「お疲れ」

ん？瑞葉？

やっと出て来たの、か……

「なんだ、そのぞろぞろいっぱいいるのは？」

さっきより増えてないか

「みんな帰りたく無いって言うから」

いやいや限度ってもんがあるだろ……

「帰せ」

さすがにうっとうしい

そもそも全員俺を睨んでるのが怖い

「むう、仕方ないなぁ……」

『キリー！』

ん？

『馬鹿ぁ！』

バッシャーン！

うお！冷たっ！

『鳥に襲われた！怖かった！キリの馬鹿ぁ！』

わ、悪かった……

「なに、やってるの？」

「いや……」

『馬鹿馬鹿馬鹿ぁ！』

わかった！わかったから落ち着け

『グスン……落ち着けるか馬鹿！』

バッシャーン！

「熱っ！熱湯は止めろ！」

「だから、何を……ん？」

お？瑞葉に緑色の精霊が耳打ちして……

「最低……」

スパパパンッ

何故！？

『キリの馬鹿ぁ！』

バッシャーン！

っう！？

だから熱湯は止めろ！！

「うぅ、疲れた……」

「ごめんね霧谷……」

あのあと全身ビショビショになるまで水ぶっかけ攻撃を受けてなんとかウェルを宥めた俺は、今やっと瑞葉の誤解を解いた

殴られたり蹴られたりした分ウェルより辛かった

泣きそうな顔で怒ってる瑞葉の相手はそれ以上に辛かった

なんか風精霊にとんでもないガセネタを吹き込まれたらしいが……

一体何を？

うむ、わからん……

ま、それにしてもさすが腹黒

あとでしっかり星になって貰おう

scene15（後書き）

瑞葉ちゃん久しぶりの登場

さてそろそろバトバトいくぜ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2153m/

Re:TURN

2010年10月10日19時52分発行